

バッハとモーツァルト-4

(2) モーツァルトはロ短調ミサ曲を知っていた？ ロ短調ミサ曲とハ短調ミサ曲の共通点

素人ゆえ学術的な裏付けは出来ませんが、筆者なりの直感で以下にハ短調ミサ曲に現れているバッハ、とりわけロ短調ミサ曲からの影響を示唆する箇所を挙げていきたいと思ひます。

とりわけ筆者が強く感じるのは二つのミサ曲に存在する共通点です。それは以前から何となく感じてはいたのですが、今回両曲を続けて練習し演奏した体験と、「ハ短調ミサ」作曲の動機や「バッハ・ヘンデル体験」などを学んでいる過程でより明確になり、最近では「ひょっとしてモーツァルトはロ短調ミサ曲を知っていたのではないか？」と考えるようになりました。

まずは“Kyrie”。その調性(ハ短調とロ短調)・構成・テンポがバッハ「ロ短調ミサ」の“Kyrie”と共通しているとは思われませんか。無論「ミサ通常文」という同一のテキストに作曲しているわけですから、曲想が似てくるのに不思議はありませんが、構成を見てみるとモーツァルトでは前奏に続いて合唱が *Andante moderato* で“Kyrie eleison”(主よ、憐れみたまえ)を模倣様式で歌います。バッハの場合は冒頭、5声(*Adagio*)のホモフォニーで憐れみを求める叫びを上げた後、長い前奏(*Largo*)を経てテノールに始まる合唱フーガとなります。「ハ短調ミサ」では合唱の間に“Christe eleison”を歌うソプラノソロが挿入されているところはバッハと異なりますが、バッハも“Christe eleison”は曲を分けてソプラノとアルトの二重唱で歌わせています。モーツァルトが「あわれみの讃歌」全体を一つの楽曲にまとめているのに対しバッハは3曲で構成していますが、その内容は合唱(Kyrie)-独唱(重唱)(Christe)-合唱(Kyrie)と共通しています。モーツァルトの“Kyrie”はその祈りの切実さにおいてバッハと変わるところがありません。むしろ「ハ短調ミサ」の“Kyrie”は、ザルツブルク時代(1779年)に作曲した彼の「戴冠ミサ」ハ長調 KV 317(晴れやかさ)や、最晩年の傑作「レクイエム」ニ短調 KV 626(切迫感)の“Kyrie”とは全く曲想が異なるといえます。しかし「ハ短調ミサ」の“Kyrie”がモーツァルトの作曲したミサ曲の中で例外的であるかといえば、必ずしもそうではありません。同じハ短調で書かれた「孤児院のミサ」KV 139(1768年)では、“Kyrie”が器楽の間奏を交えた和声的な合唱で壮大なカデンツを歌い上げるところなど「ハ短調ミサ」に比べられる、というよりバッハの「ロ短調ミサ」そっくりです。「ロ短調ミサ」の存在など知る由もない12歳(!)のモーツァルトにこのような音楽を書かせたのはやはりテキストの持つ力と言うべきでしょうか。

次に“Sanctus”の楽章が「ロ短調ミサ」の同じ箇所を思い出させてくれます。バッハは“Sanctus”と“Pleni sunt Coeli”を6声の合唱、“Osanna”を8声の二重合唱として作曲しました。“Sanctus”は3連符のリズムに乗った47小節にわたる和声的な音楽、“Pleni sunt Coeli”は3/8拍子の軽快なフーガ、“Osanna”はステレオ効果満点の二重合唱です。一方モーツァルトはこれら3部分の一つにまとめた8声の二重合唱曲として、堂々たる“Sanctus”、“Pleni sunt Coeli”(ここまでの17小節)に続けて“Osanna”を二つの主題を持つ二重フーガに仕立てました。両者は必ずしも様式的に符合するわけではありませんが、テンポの変化や二重合唱の導入などに共通性が認められます。

「ハ短調ミサ」全体を見渡しても、中世以来の古い様式である“*Alla breve*”(2分の2拍子。2分音符を1拍と数えて1小節に2拍分入る拍子) (“*Cum Sancto Spiritu*”)や、鋭い付点リズム (“*Glatias*”と“*Qui tollis*”のオーケストラパート)を採用するなど、合唱曲においては二重合唱を含めてバッハの作品を通して学んだと思われる様々な古い作曲法が顕著です。

ところが独唱曲はいずれもイタリアオペラを思わせる華やかな技巧をちりばめたアリアや重唱で占められており、古典的な作曲法による合唱曲との対比が鮮やかです。これは当時のソリストがオペラの舞台上で歌うことを主たる活躍の舞台としたのに対し、合唱を担う教会の聖歌隊では伝統的に古様式の音楽が歌い続けられていたと言う事情によるもの、と筆者は考えます。

もう一つ、二つのミサ曲の共通点として、バッハとモーツァルトは教会からの依頼を受けずに作曲しているということが挙げられます。「ロ短調ミサ」作曲の動機は今もって謎とされていますが、「ハ短調ミサ」の方はモーツァルトが自ら明らかにしたように、コンスタンツェとの結婚に際してザルツブルクの教会に奉献しようとした、そしてこの曲の演奏を通じて父レオポルトにコンスタンツェとの結婚を祝福してもらおう、と言うことです（「清水ヶ丘の風」第6号をご参照下さい）。

ここでロ短調ミサ曲とハ短調ミサ曲の共通点をまとめて表にお示します。

	J.S.バッハ	W.A.モーツァルト	共通点または特徴
作曲の動機	自発的	自発的	教会からの依頼なし
調性(冒頭部分)	ロ短調	ハ短調	短調
テンポ	Adagio-Largo	Andante moderato	ゆっくりしたテンポ
構成			
Kyrie I	5声合唱 フーガ	4声合唱 模倣様式	古典的様式
Christe	S1, S2 二重唱	ソプラノ独唱	女声の独唱または重唱
Kyrie II	4声合唱 模倣様式 Alla breve	Kyrie Iの再現	古典的様式(バッハでは中世以来の伝統を採用)
Sanctus	6声合唱	8声二重合唱	ステレオ効果
Osanna	8声二重合唱	8声二重合唱 二重フーガ	ステレオ効果

さて、ようやくのことここまで書いたところでふと思ひ立ち、これまで参考にしてきたモーツァルト関連の文献ではなく、はるかに数多いバッハの研究書の中に、上に述べたことを裏付ける手がかりはないかと「ロ短調ミサ」の楽譜の伝承を調べてみたところ、果たしてそこには「ロ短調ミサ」とモーツァルトの接点と言うべき情報がありました。それはクリストフ・ヴォルフ著「バッハ ロ短調ミサ曲」（礒山雅訳 春秋社 2011年）なる文献で、著者ヴォルフは「バッハの次男（カール・フィリップ・エマヌエル：筆者注）は、父の遺産分割の際、大ミサ曲のスコアを手に入れた。（中略）彼と密接なつながりのあったヴァン・スヴィーテン男爵は、おそらく1770年代にハンブルクで筆写譜を入手し、それはのちにヨーゼフ・ハイドンの所有となった。だとすればモーツァルトが未完の《ハ短調ミサ曲》を作曲する際に、ヴァン・スヴィーテンを経てバッハの作品にアクセスできたことは、間違いないと考えられよう」と述べています。

モーツァルトがバッハのロ短調ミサ曲を知っていたかも知れない、というヴォルフの推測が事実であれば、モーツァルトがハ短調ミサ曲を作曲するに当たり、ロ短調ミサ曲からの影響を全く受けない筈はありません。本論で述べたようにその影響と思われる箇所が「ハ短調ミサ」のそこかしこに見て取れるとするなら「モーツァルトはバッハのロ短調ミサ曲を知っていた」と言い切っても良いのではないのでしょうか。「世界のバッハ研究の最高峰」（礒山氏、同書後書き）と言われるヴォルフの見解は期せずして筆者の想像を支持してくれるようで、大いに我が意を強くしています。

【後記】 今回は多少強引な議論の進め方で、あるいはご異存もあるかと思ひます。ご意見をお寄せいただければ幸いです。5月に始まった楽事通信も山田様との共同作業で滞りなく13号まで到達でき、今回が今年最後の発行となりました。ご愛読に感謝致します。来年もよろしく、皆様良いお年をお迎え下さい。 （新井）